

融雪促進と今後の営農技術対策

平成24年3月13日
北海道農政部

今冬(12月～2月)の大雪の影響から、融雪にかなりの遅れが見込まれていますが、札幌管区気象台の情報によると、3月中旬以降、引き続き低温となることが予想されているため、以下の対策を参考に春期の作業が遅れないよう一層の融雪促進などに努めてください。

第1 ビニールハウスの共通事項

- 1 雪が積ってきたら速やかに雪降ろしを行い、ビニールが雪でたるんだり、滑落しなくなるのを防止する。
- 2 気温が平年より低温で経過することが予想されることから、ハウスの気密性を高めるとともに、加温施設がある場合は可能な範囲で加温し、また、二重ハウスの場合は日中内張を開放するなどして、外張り天張面を温め落雪を促す。
ただし、ハウス内に育苗中の作物や栽培作物がある場合は、作物の適温管理の範囲内とする。
- 3 ハウスのビニールをはずし、パイプのみの場合も、放置しておくとも雪の沈み込みに伴い骨材が破損する恐れが生じることから、骨材周辺の除雪を行う。
- 4 降雪により全壊したハウスは、早急に代替えハウスを設置し、一部折損した場合はパイプの交換を行い補修を行う。
- 5 融雪水がハウス内に入り込まないように、ハウス周辺の排水路を確保して速やかな排水に努める。

第2 融雪促進の共通事項

1 融雪材の散布量と回数

水田の場合はケイ酸質資材を10a当たり90～120kg、畑には融雪防散炭カルやアッシュを40～60kg散布して融雪を促進する。

融雪材の散布後に20cm以上の降雪がある場合は効果が小さくなるので、再散布に対応できるように資材の確保に努める。

2 融雪材散布時の注意点

吹き溜まりや防風林の際など積雪量の多い場所には確実に散布する。また、融雪材を均一に散布するよりムラに散布する方が、雪解けが始まった時に表面積が増加し、融雪が促進される。

3 融雪水の排除

融雪水がほ場に停滞することがあるので、排水溝が十分に機能するように整備し、速やかに排除できるようにする。

第3 水稻

1 育苗ハウスと床土の準備

- (1) 健苗育成には、床土の十分な乾燥と適期は種が重要である。そのためには、育苗ハウス設置場所の除排雪を行い、3月中か遅くても4月初めまでには育苗ハウスのビニールの展張を終了し、置き床の早期乾燥と地温の上昇に努める。なお、融雪材を使う場合は、水稻苗代専用融雪材か床土と同じ土壌を散布する。
- (2) 育苗ハウス周辺には簡易明きょや排水溝を掘り融雪水の排除に努める。
- (3) 海岸部や石狩・南空知など、風が強い地域では育苗ハウスの周囲に防風網を設置し、ハウスの破損を防ぐとともに温度管理のためのビニール開閉を容易にする。
- (4) 育苗ハウス完成後は、日中は時々換気を行うなどハウス床土の早期乾燥に努める。
- (5) 土が乾燥したら早めに置き床や自家培養土のpHを確認し、pH 4.5～5.0となるように酸度矯正を行う。
- (6) 地域で苗が不足する場合を想定し、予備苗を協同で利用できる体制を検討する。

2 水田の準備（早期乾燥化対策）

- (1) 融雪後は直ちに滞水箇所の溝掘りなどを行うと同時に、必要に応じ畦切りを実施し速やかに表面水をほ場外に排出する。ほ場乾燥後には心土破碎を行うなど土壌乾燥を進め、乾土効果が十分に発現するよう努めることとするが、畦畔漏水の激しいほ場では畦際部の施工は避ける。

3 作付け品種の選定

- (1) 北海道水稻地帯別作付指標や地域の作付目標を参考に選定し、栽培適地外での作付けはしない。
- (2) 品種選定は特定品種に偏ることなく、特性を踏まえた複数品種の適正な配合に努め、作業競合の回避と危険分散を図る。

4 種子予措

- (1) 浸種は水温を10～12℃とする。浸種日数は通常5～6日とするが、平成23年産種子は休眠が深い可能性があることから、通常より1～3日浸漬日数を延長して充分吸水させる。なお、浸漬中には2日に一回程度水を静かに交換し酸素不足にならないように注意する。

- (2) 催芽の最適温度は30～32℃であるが、温度むらから網袋により発芽の程度に差を生じることがある。催芽時間は予措の状態、品種や種子の採種年次等によっても異なるので、芽の伸長程度を確認し、ハト胸状から伸びても2mm程度とする。

5 は種時期の設定

- (1) は種日は育苗型式ごとの移植適期及び育苗日数から逆算して決定する。近年は移植時の苗の葉齢が進みすぎ、苗質を低下させている事例が多く見られる。移植日から逆算して育苗期間が長くなりすぎないように、は種時期を適切に設定する。

第4 畑作物

1 春まき小麦

- (1) 春まき小麦作付け予定のほ場は、は種作業が遅れないよう融雪促進に努め、ほ場の乾燥化を図る。砕土・整地及びは種作業を過湿土壌条件で実施すると、土壌物理性が悪化し排水性の不良による生育抑制に繋がるので避ける。
- (2) は種時期が大幅に遅れると生育期間の短縮により収量の低下を招くとともに、赤かび病に罹病割合が高くなるので、大豆等のへ転換を検討する。

2 秋まき小麦

(1) 融雪水の滞水対策

融雪水がほ場に滞水すると、秋まき小麦の生育が遅れるほか、枯死しやすくなるため、排水溝が十分に機能するように整備する。

(2) 起生期分肥対応

融雪期後3～7日で起生期を迎えるので、畑に入れる状況になり次第分肥を実施する。分肥量は茎数や地力を十分に考慮し決定する。

「きたほなみ」は起生期以降の分けつが旺盛となる特徴がある。そのため、過剰な窒素施肥は倒伏の危険性が高くなるので避ける。

施肥にあたっては、「各地域における秋まき小麦「きたほなみ」の高品質安定栽培法を参考にする（平成23年度普及推進事項）。

(3) 雪腐病の発生対応

雪腐病発生ほ場において、茎数が不足する場合は起生期の窒素施肥量を多くし、茎数確保に努める。

また、廃耕が見込まれる場合、大豆等のへ転換などを検討し、それらに必要な種子や肥料などの資材を早めに手配する。

3 てん菜・馬鈴しょ

てん菜・馬鈴しょを作付け予定のほ場も、は種作業や移植作業が遅れないよう、融雪促進に努め、ほ場の乾燥化を図る。

第5 園芸（野菜・花き）

1 ほ場の融雪促進

(1) 施設園芸

ハウス周辺の除排雪を進め、速やかにビニールをかけてハウス内の融雪と乾燥を図る。また、融雪水がハウス内に入り込まないように、明渠や簡易排水路を整備し排水対策に努める。

(2) トンネル早熟栽培

ほ場の融雪促進と排水対策に努め土壌の乾燥を促す。マルチ作業は、は種や定植作業の7～10日前までに行い、地温の上昇を図る。

(3) 露地栽培

融雪が遅れると、は種や移植作業が遅れたり、低地温による発芽の遅れや抽苔の発生が懸念される。特に、たまねぎの早期は種作型では、移植適期が4月20日前後であることから、融雪と排水を促進する。

2 育苗管理

融雪の遅れが懸念される地域では、定植の遅れに備え次の点に留意して育苗管理する。

(1) 融雪状況と育苗日数を勘案しては種を行い、老化苗にならないように注意する。

(2) 温度管理は適温の範囲内で低めとする（極端な低温管理はトマトでチャック・窓開き果が多発するなど苗質の低下を招くため、あくまでも適温内で管理する）。

(3) 灌水は控えめとする。しかし、極端に萎れさせないようにする。

(4) 鉢の間隔を広げて苗が徒長しないようにする。

(5) 定植が遅れて肥料切れを起こしそうな場合には、液肥等で追肥を行う。

(6) 地域で苗が不足した場合を想定し、移植後でも一定期間苗の管理を行うなど、予備苗を協同で利用できる体制を検討する。

第6 果樹

1 積雪期間中の対策

(1) 雪に埋まった枝は掘り出すか、スコップ等で幹周辺部の雪を排除し積雪沈降による枝折れを防ぐ。掘り起こしが無理なら、埋もれた枝の周りの随所に、スコップで雪に刻みを入れ、雪のつながりを遮断する（雪層切断）。

(2) 融雪を早めるため融雪材を散布する。

2 事後対策

(1) 雪害の発生が予測される園地でのせん定作業は、下枝の被害状況を確認してから行う。

(2) 2/3以上裂開している枝は、ゆ合の見込みがないので剪去して傷口にゆ合剤を塗る。

またゆ合可能な枝は、傷口を密着させて支柱で補強する。

- (3) 傷口から、りんごでは腐らん病の発生が予想されるので、ゆ合剤(トップジンMペースト)を塗布する。
- (4) 樹形を損ねた樹では、新しい枝の養成や高接ぎなどで樹形の立て直しを図る。

3 獣害対策(間接被害)

- (1) 雪の多い年は、ウサギやネズミの食害が多くなる。ウサギに噛み切られた枝は、生育期に新梢がうまく出ないこともあるので、もう一度切り直しておく。
- (2) ネズミの害は、下層の雪が解けはじめ、雪と地面の間に隙間ができてくると加害されやすいので、この時期には数回、幹の周りの雪を踏み固めておく。

第7 酪農・畜産

1 ほ場滞水と冬枯れ対策

低地、くぼ地のある草地では、アイスシートや停滞水による冬枯れが発生しやすいので、溝切りなどを行い排水に努める。

2 ふん尿貯留施設及び周辺的环境対策

ふん尿貯留施設周辺に側溝を掘り、融雪水が浸入するのを防ぐ。

3 畜舎・施設の対策

農場敷地内排雪場からの融雪水が排水されていることを確認する。畜舎、パドック及びサイロ周辺の溝掘りを行い融雪水等の浸入を防止し、作業通路は排水に留意し、泥濘化、水溜まりをなくす。

お問い合わせ先：食の安全推進局技術普及課（電話011-231-4111 内線27-823）